

〈原著〉

幼小連携の視点からみた教育に関する一考察

— 言動活動を通して「考えを伝える」力を育む —

高 橋 真由美 (藤女子大学 人間生活学部 保育学科)

駒 形 武 志 (札幌市立鴻城小学校 校長)

小 川 恭 子 (藤女子大学 人間生活学部 保育学科)

本研究は、社会人にもとめられるコミュニケーション能力のひとつである「考えを伝える力」に着目し、その力が教育現場の言語活動においてどのように育まれているのかを実践例を用いて示すことを目的として行った。言語活動に実効性を持たせるためには発達段階に応じた展開が不可欠であるとされているが、本稿では、幼小連携の視点から、幼稚園では自分の考えを伝えるための言語活動がどのように行われているのか、小学校では幼稚園で育まれた伝える力をどのような言語活動を通して発展させているのかを実践例を通して検証した。その結果、幼稚園での生活や遊びを通して育まれた伝える力が、小学校以上の教育の基礎になっていることを示した。さらに幼稚園での経験は、小学校以上の教育から本格化する、より抽象的な表現方法である「文字」を用いて考えを伝えることにもつながっていくことを指摘した。

キーワード：言語活動、幼小連携、考えを伝える力

1. はじめに

平成 20 年 1 月の中央教育審議会答申において、学習指導要領の基本的な考え方として「言語は知的活動（論理や思考）だけではなく、コミュニケーションや感性・情緒の基盤でもある。」との方向性が示された。これは、「言葉」を単なる思考との関係性のみでとらえるのではなく、豊かな人生を送るための大切なツールとしてとらえていることを示している。

このような基本方針が示された背景の一つに、IT 時代に生きる現代の若者に不足している「生きる力」としての「コミュニケーション能力不足」がある。確かに「最近の若者はコミュニケーション能力が低い」と耳にすることが多い。これについて、平尾ら (2007) は、山口大学の学生のコミュニケーション能力を「聴く力」「観る力」「感じる力」「質問する力」「伝える力」の 5 つの力に分解し、アンケート調査より「5 つの力それぞれ正の相関性を持つこと」「観る力・聴く力の得点が高く、質問する力・伝える力の得点が相対的に低い」ことを報告した¹⁾。得点が高い「観る力・聴く力」は直接相手に働きかける力ではないが、得点が高い「質

問する力・伝える力」は直接相手に働きかける力である。つまり、この結果より、他人との意思疎通や信頼関係といった人間関係構築に必要な「働きかける力」としてのコミュニケーション能力が不足していることが指摘できる。日本経済団体連合会の新卒採用に関するアンケート調査結果（平成 28 年 11 月）でも、選考にあたって特に重視した点として「コミュニケーション能力」が 13 年連続で第 1 位 (87%、複数回答) であった²⁾。これは社会人として今後も引き続き求められよう。

このように社会人として必要とされるコミュニケーション能力ではあるが、それは発達段階にそって培われるものであり、いきなり身に着くものではない。本稿では、コミュニケーション能力の中でも「伝える力」に着目し、発達の連続性を踏まえた幼児期から児童期にかけて、言語活動との相関性の中で「伝える力」がどのように育まれていくのかについての検討を試みた。幼稚園では自分の考えを伝えるための言語活動がどのように行われているのか。小学校では、幼稚園で育まれた伝える力をどのような言語活動を通して発展させているのか。実践を交えながら検証する。

2. 言語活動とは

ところで、平成 20 年における中央教育審議会答申³⁾では、以下の 6 点を示し、これらの学習活動の基盤となるものは広い意味での言語活動であるとした。

- ① 体験から感じ取ったことを表現する
- ② 事実を正確に理解し伝達する
- ③ 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする
- ④ 情報を分析・評価し、論述する
- ⑤ 課題について、構想を立て実践し、評価・改善する
- ⑥ 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる

さらに、同答申では「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」として「各教科等における言語活動の充実、今回の学習指導要領の改訂において各教科等を貫く重要な改善の視点である。(略)。このため、国語科において、これらの言語の果たす役割に応じ、的確に理解し、論理的に思考し表現する能力、互いの立場や考えを尊重して伝え合う能力を育成することや我が国の言語文化に触れて感性や情緒をはぐくむことを重視する。具体的には、特に小学校の低・中学年において、漢字の読み書き、音読や暗唱、対話、発表などにより基本的な国語の力を定着させる。また、古典の暗唱などにより言葉の美しさやリズムを体感させるとともに、発達の段階に応じて、記録、要約、説明、論述といった言語活動を行う能力を培う必要がある。」と指摘した。

この答申を受けて文部科学省は、平成 20 年（2008 年）3 月に小・中学校の学習指導要領及び幼稚園教育要領を、平成 21 年（2009 年）3 月に高等学校・特別支援学校の学習指導要領を改訂した。その詳細はここでは省くが、改訂学習指導要領のポイントは「子どもたちの現状をふまえ、『生きる力』を育むという理念のもと、知識や技能の習得とともに思考力・判断力・表現力などの育成を重視していることである。また、言語や理数の力などを育むための教育内容を充実させている」ことであり、それを実現するための主な改善事項の一つに「言語活動の充実」として「国語をはじめ各教科等で記録、説明、批評、論述、討論などの学習を充実」を挙げている⁴⁾。つまり、「記録」「説明」「批評」「論述」「討論」という「言語活動」を中核に据えて、学習活動への取組を組み立てる方向性が示されたといえる。中央教育審議会答申にある「表現」「伝達」「説明」「論述」「(課題を)評価・改善」「(考えを)発展

といった「言語活動」の表現を考え合わせると、言葉の持つ意味の重要性を再認識させられる。

なお、平成 28 年 3 月 14 日に行われた「平成 27 年度『言語活動の充実に関する実践研究』の取組を踏まえての有識者での意見交換(文部科学省)」の報告⁵⁾では、「言語活動の今後の方向性」として 3 点を指摘しているが、その 2 点目に「言語活動により時数の確保が難しくなるという見方もあるが、学年等を超えて長期的に言語活動を行う能力の育成を積み重ねていくことにより、一層効果的で効率的な学習が可能となるという視点も重要である。」とし、具体的には「言語活動を行う前提として、発達段階に応じて言語活動を行う上で必要な能力の育成（語彙の獲得、概念の獲得など）を図ることが必要。」との一文が示された。

このような一連の動向より、「言語活動」は子どもたちの知的活動の促進、感性や情緒の基盤作り、人とのコミュニケーション能力の向上等に大きくかかわっていること、その活動に実効性を持たせるためには発達段階に応じての展開が不可欠であること、その点を踏まえてのかかわりが現在の教育現場で求められていることが指摘できる。では、子どもの発達段階に応じた言語活動とはどのようなものなのだろうか。以下では、「考えを伝える」力を育むことに焦点を当て、幼稚園と小学校低学年での実践を紹介していく。

3. 幼稚園における言語活動

教育基本法第 11 条に、「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであることにかんがみ、国及び地方公共団体は、幼児の健やかな成長に資する良好な環境の整備その他適当な方法によって、その振興に努めなければならない」とあるように、幼児教育はその後の教育の基礎となるものである。言語活動に関してもそれは同様であり、幼児期の言語活動は小学校以降の教育の基礎を培うものと言うことができる。では、その「基礎」とはどのようなものなのだろうか。ここでは、「考えを伝える」力に着目し、幼稚園教育要領が目指していることを明らかにしたうえで、考えを伝える力の基礎が幼稚園の実践でどのように育まれていくのかについて考えていく。

(1) 幼稚園教育要領における「考えを伝える」力

1) 現行の幼稚園教育要領

幼稚園教育の基本は「環境を通して行う」ことにある。幼児は園での遊びや生活を通して身の回りのあらゆる環境からの刺激を受け、自分から興味をもってそれらにかかわりながらさまざまな活動を展開し、学び

を得る。そのため幼稚園教諭には、幼児の興味関心に即した環境を整え、それらの環境と幼児をうまく結びつけるような援助が求められる。

幼稚園教育要領第2章には、幼児教育のねらいと内容が幼児の発達の側面から「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域にまとめ示されている。幼児教育においては、この5領域を小学校以上での教科のようにそれぞれ独立したものとして扱わず、遊びや生活を通して総合的に指導していくこととされている。本稿で取り上げる「考えを伝える」力を育むことも5領域が関連しているものとしてとらえる必要があるが、ここでは最も関連のある領域である「言葉」を詳しく見ていく。

領域「言葉」は「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う」ことを目的とした領域である。そのために(1)自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう(2)人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう(3)日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる、という3つのねらいが設定されており、それらを実現するための10の内容、内容の取扱いが4点示されている。10の内容のうち、考えを伝える力に関連しているものは、「したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する」「したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする」「人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す」である。これらから、幼児教育では、「自分の体験」をベースとした気持ちを自分なりの言葉で相手にわかるように伝えることが重視されていることがわかる⁶⁾。

現行の幼稚園教育要領が2008年に改訂された際に、領域言葉の「内容の取扱い」には「幼児が自分の思いを言葉で伝えるとともに、教師や他の幼児などの話を興味をもって注意して聞くことを通して次第に話を理解するようになっていき、言葉による伝え合いができるようにすること」⁷⁾という一文が追加された。このことから、現行の幼児教育においては、教師や友達とのふれあいを通し、言葉による伝える力を養うことが一層求められていることがわかる。

2) 新しい幼稚園教育要領

幼児を取り巻く時代の変化や幼児の実態から、幼稚園教育要領は2018年に改訂される。環境を通して行う教育、5領域の考えは継続されるが、今回の改訂のポイントは、カリキュラム・マネジメントをすべての

教職員で確立することや、小学校教育への接続の在り方を明確にするために「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が10個の項目で示されていることである。その中のひとつに、「言葉による伝え合い」が挙げられており、その説明として「言葉を通して先生や友達と心を通わせ、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付けるとともに、思い巡らしたことを言葉で表現することを通して、言葉による表現を楽しむようになる」と示されている⁸⁾。このように、新しい幼稚園教育要領においても、小学校以上の教育を視野に入れた伝える力（表現する力）としての言葉が重視されていることがわかる。

(2) 幼児期における「考えを伝える」力の基礎とは

1) 情緒の安定

幼稚園は幼児にとって初めて経験する集団生活の場である。集団生活では、家庭では経験したことがない楽しさを味わうと共に、自分にとって良いことばかりではないことも経験する。そのような生活の中で自己を発揮するためには、教師の存在のあり方が大きく影響する。入園したての子どもにとって、担任教師が一番頼れる存在である。困った時に助けてくれ、楽しい時に共感してくれ、自分の気持ちを一番に大切にしてくれる存在である担任教師がそばにいることが、幼児の気持ちの安定につながる。この安定した情緒が自己を発揮するための基礎となり、自己を発揮することができるからこそ、自分の考えを伝えたいという気持ちが生まれるのである。そのため、情緒の安定は考えを伝える力の前提となるものである。

2) 豊かな体験

前述したように、幼稚園教育要領の5領域「言葉」の内容には、「したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する」とある。幼児は生活の中で心を動かすような体験をしたときに、それを親しい人に言葉で伝えたいくなるものである⁹⁾。それは、面白いこと、発見したこと、不思議に思ったこと、不満なこと、悲しいことなど、さまざまである。このように自分が主体的に環境にかかわり、豊かな体験をしたことで沸き起こる気持ちを共有したい相手に伝え、それが共感されることを繰り返し経験することによって、自分の考えを伝えることに楽しさを感じるようになる。そのことが考えを伝える力の基礎となるのである。そのためには、幼児が心を動かすような多様な体験をすることが大切である。

3) 伝えたい相手がいること

幼児が心を動かす体験をし、何かを誰かに伝えたいと思ったとしても、それを共感的に受け止めてくれる

相手がいなければ、伝える楽しさを感じることはできない。幼稚園の場合、その最初の相手は教師である。教師に共感的に受け止められる経験をした子どもは、次にまわりの友達にも同じように気持ちや考えを伝えたいとなる。その際に必要なのは、教師の援助である。小さな子どもはまだ語彙も乏しく、伝え方も下手である。そのような時に、教師が子どもと子どもをつなぐ役割を果たすことによって、友達同士の伝え合いの楽しさを感じるようになる。このように子どもたちの間に、たくさんの伝えたい相手ができるような関係をつくっていくことも考えを伝える力の基礎となるのである。

(3) 保育実践にみる考えを伝える力の基礎

1) 3 歳児の考えを伝える力

幼稚園において、3 歳児は家庭から集団生活へ適応する第一歩であるため、クラスにおいても最初は教師との一対一の関係を好む子どもが多い。遊びもひとり遊びが多いが、時々面白いことが近くで行われていたり、偶然の身体接触から短い時間ではあるが、友達と活動を共有する様子も見られる。以下はそのような時期の子どもたちの様子である。

〈事例 1〉 3 歳児 5 月

A 君と C 君が、近くにいた R 君を見て楽しそうに追いかけ始める。「R くーん！」と言って抱きついたり、くっついたりして周りにアピールしている。その姿に R 君も嬉しそうに笑う。その様子を見ていた D 君も「R くーん！」と手を引っ張って抱きつく。そのまま 4 人は全員でくっつきながらじゃれあう。

この事例では R のことが好きな A と C が、「一緒に遊ぼう」「R 君と一緒にいたい」という気持ちを身体的な接触で伝えようとしている。4 人がくっつきじゃれあうことも、「4 人は仲良し」という気持ちを言葉なしで共有しているように思われる。これは 3 歳児によくみられる光景である。このような身体的なかかわりも、考えを伝える力の基礎となるものとしてとらえて見守ることが大切である。

集団生活を重ねていくと、3 歳児にも「お気に入り」の友達ができてくる。そのような時期になると、少ない語彙を駆使しながら、自分が思っていることを友達に言葉で伝えるようになっていく。以下は、泣いて登園した友達を思いやる 3 歳児達の事例である。

〈事例 2〉 3 歳児 10 月

お母さんとの別れ方に納得がいけない S ちゃんが廊下で泣いている。するとそこに、同じクラスの 3 歳児、K ちゃん、M ちゃん、O くんがやってきて、涙を浮かべる S ちゃんに「どうしたの？」と聞く。「ママとバイバイしなかった」と S ちゃんが答えると、K ちゃんが「ママはあとで来るよ、K ちゃん達と一緒に遊んでいたら悲しくなくなるよ」と言う。それを聞いた M ちゃんは「あのね、心の中でね、悲しいのをなくすの」、O くんは「廊下にいたら寒いよ」と、それぞれ S ちゃんに言葉をかける。それでも S ちゃんの表情は変わらないため、3 人は諦めたように部屋に戻る。ところがしばらくするとまた廊下にやってきて、K ちゃんは手にした何枚かの塗り絵を S ちゃんに見せて、「ね、S ちゃん、昨日これ一緒にしたでしょ？また一緒にしよう」と S ちゃんを誘う。M ちゃんと O くんもそれぞれ「一緒に楽しいよ」「お弁当も一緒だよ」などと声をかける。その言葉を聞いて S ちゃんの表情が少しだけやわらいだ。

語彙が少なく、表現もうまくできない 3 歳児ではあるが、この事例では、3 人が自分なりの言葉で一生懸命 S ちゃんを慰めようとしている。自分の思いや考えを言葉にすることが人に伝わり、人は変わることを、3 人は感じたことだろう。このように日常の何気ない出来事の中でも考えを伝える力の基礎が培われているのである。

2) 4 歳児の「考えを伝える」力

4 歳児になると、語彙も増え、仲の良い友達が固定し始め、遊びの中で自分の考えを言葉で相手に伝え、遊びのプランを立てていく姿が見られる。以下は 4 歳児のままごと遊びの事例である。

〈事例 3〉 4 歳児 3 月

R、E 子、Y 子がハムスターごっこをしている。R：「待ってー、お家に帰ろう。ハムね、足が痛いの」3 人はままとコーナーに戻る。E 子：「足伸ばしな」E 子、R に布団をかける。R が足を動かして寝ている。E 子：「足、動かすなよー」Y 子：「ハムちゃんは（自分の事）寝ているの」E 子、Y 子のぶんの布団を持ってくる。Y 子：「えーん、えーん。泣いたことね」E 子：「熱があるの？」E 子、Y 子の額に手をあてる。さきほど買ってあった薬（小さいコップ）を持って来て、Y 子の胸のところにぬっている。E 子：「もう大丈夫よ」

ごっこ遊びは、自分のイメージと相手のイメージを

すり合わせながらひとつのイメージを形作っていく遊びである。そのため、自分の考えを相手に伝えつつ、相手の考えを読み取っていくことを遊びの中で経験する。4歳児になると、ストーリーが共有され、遊びの時間もある程度の長さを保てるようになる。その際の特徴として挙げられるのは、セリフ以外の言葉の使用である。事例3においても、Y子が「ハムちゃんは寝ているの」「泣いたことね」など、セリフではない自分のプランを説明する言葉を使用している。このように、子どもたちは、遊びの過程で思いついた自分の考えを言葉によって明確に遊び相手に伝えることで遊びがさらに楽しくなっていく経験をしている。この積み重ねこそが、自分の考えを伝える力の基礎となっているのである。

3) 5歳児の「考えを伝える」力

5歳児は仲の良い友達が固定し、気の合うメンバーでそのグループが好む遊びを楽しむ姿が見られる。自分の考えを強くもっているため、相手と衝突することもありつつあるが、相手の言い分を聞いて自分の考えとの調整を行う場面も見られる。また、状況を的確に判断し、その状況にあった解決方法に関する考えを提案することもできるようになってくる。

〈事例4〉 5歳児7月

お弁当の時間になり、子どもたちがそれぞれ一緒に食べたいお友達と食べたい場所を選んで座っていく。子どもたちの大半が着席した頃、年中児のMちゃんが、男の子4人が座っているテーブルの近くで大泣きをしながら、着席しているSちゃんに掴みかかろうとしていた。先生が理由を尋ねると、「一緒に食べようと約束していたSちゃんが違う人と座ってしまった」とのこと。一方、Sちゃんによると、「Mちゃんを待っていたのに来るのが遅く、途中でAちゃんと一緒にふざけていたから、Aちゃんと食べるものだった」と理由を説明した。そのやりとりを聞いていた隣のテーブルの年長児のHちゃんは、「Mちゃん、もうちょっと早くお支度して、ちゃんとSちゃんのところに来ればSちゃんと食べれたのに。でも、Sちゃんも約束したんだから、もう少し待ってあげると良かったね。」と二人に言い、「こっちの場所、空いてるよ。Sちゃんの隣じゃないけど、Sちゃんと近いからここで食べる？」とMちゃんを誘ってくれた。

この事例は、Hが自己の問題ではなくても、それぞれの考えを総合的に判断し、どういった解決策があるのか、自分なりの解決方法を言葉でわかりやすく年下

の子に伝えている場面である。ここに至るまでは、H自身が様々なトラブルを経験し、教師や年上の子どもたちに助けられながら解決してきたという背景があるだろう。このように年長児ともなれば、相手の気持ちと折り合いをつけながら自分の考えを伝えることができるようになる。この力は園生活において子どもが経験する様々な場面において育まれていくのである。

4) 様々な活動で「自分の考えを伝える」力を育む

これまで子どもたちの遊びや生活の場面を取り上げ、考えを伝える力の基礎がどのように育まれていくのかを示してきたが、全員で活動する場面においても、教師は意図的にその力を育む活動を行っている。例えば発表会や運動会などの行事の際に、「どのような出し物をするか」「どうしたら相手チームに勝つことができるか」などの質問をし、子どもの考えを引き出し、話し合うような機会を設けるのがそれにあたる。

また、考えを伝えるツールとしての文字の取扱いは、領域「言葉」に「日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう」¹⁰⁾とあるように、基本的には教えこむことはしない。しかし郵便ごっこやお誕生日プレゼントにカードを添える活動などを通し、文字に親しむ機会をもっている園も多いだろう。本学の系列幼稚園では、誕生日の子どもへのプレゼントにカードを添えることをしているが、「〇〇ちゃん だいすき」「またいそに(いっしょに) あそぼおね」など、伝えたい気持ちを精一杯文字に託している様子が見られる。教師はお誕生会でプレゼントを渡す際にこのメッセージをひとつひとつ紹介しているが、その際のクラスの子どもたちはとてもうれしそうである。こういった活動は、やがて小学校において「文字」で考えや気持ちを伝える力の獲得につながっていくと思われる。

4. 小学校における言語活動

子どもたちの考えを伝える力を育むために、小学校では、日常の学習の場だけでなく、児童会活動や外部講師の力を借りることもある。ここでは、現行及び新しい学習指導要領が目指しているものを明らかにし、子どもたちの伝える力を育むための特徴的な三つの言語活動の実践例をとおして、子どもたちの考えを伝える力がどのように育まれていくのかを考察していく。

(1) 小学校学習指導要領

1) 現行の小学校学習指導要領

現行の指導要領が平成20年度に告示され、平成23年度に完全実施されるまでの3年間の移行期間では、教科によって異なる移行の仕方があったものの、内容

の大幅な増加を経て現状の学習内容となった。各学校では、学校を作りかえる（作り変えなければならない）最大の機会であった。

現行の学習指導要領¹¹⁾は、子どもたちの現状を踏まえ、「生きる力」を育むという理念の下、知識や技能の習得とともに、思考力・判断力・表現力などの育成を重視している。次代を担う子どもたちが、これからの社会において必要となる「生きる力」を身に付けること、そのためには、学校だけではなく、家庭や地域など社会全体で子どもたちの教育に取り組むことが大切であると記されている¹²⁾。また、「生きる力」を育むことを目指し、基礎的・基本的な知識及び技能を習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養うため、言語活動を充実することとなっている。とりわけ、国語の学習においては、単元を貫く学習課題と言語活動に着目した課題を解決する過程を重視する授業づくりが、実践研究の中で扱われてきた¹³⁾。

2) 新しい学習指導要領

①新しい学習指導要領改訂のポイント

学習指導要領は、時代の変化や子どもたちの状況、社会の要請などを踏まえて、およそ10年ごとに改訂される。小学校は平成32年度（2020年）から新たな学習指導要領に基づき全面実施される予定である。

今回の改訂¹⁴⁾では、社会の変化が加速度を増す中で、これから学んでいく子どもたちが大人になる2030年頃の社会の在り方を見据えながら、どのように知・徳・体にわたる「生きる力」を育むかを重要視している。一方的に知識を得るだけでなく、「主体的・対話的で深い学び」いわゆるアクティブ・ラーニングの視点から授業改善を行い、子どもたちがこれからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることを目指している。討論など課題に対して意見を出し合い、解決方法を探る授業を始め、国語では学んだ語彙を表現に生かしたり、身近な場面に結び付けたりと、授業で学んだことをいかに実生活に結び付け活かしていける力を養うかが課題となる。

②子どもの姿で語れることの大切さ

今回の指導要領の改訂において特徴的なところは、「教育計画」「教育課程」の編成に全職員を参画させることや、地域の教育資源を活用していくことを強く打ち出している点である。また、「子どもたちにどのような力を育むのか」「子どもたちが何を身に付けるのか」「子どもたちは、何ができるようになるのか」「子どもたちが、何を学ぶのか」「子どもたちがどのように学ぶのか」など、教育課程の基本原則に当たる部分を、

子どもたちの具体的な学びの姿で表そうとしているところにある。したがって、私たちも「子どもは…」「子どもが…」で普段の授業だけではなく、そこにつながる全ての計画を子どもの姿で語るようにしなければならない。

(2) 小学校における伝える力を育む言語活動の実践

1) 小学1年「えにつき」の実践

絵日記を書くという言語活動は、小学校の場合、夏休みや冬休みの課題として出される場合が多い。しかし、ひらがなとごくわずかの漢字を習得したばかりの1年生にとって自分のしたことや、思い・考えを絵と文章で表すということは、きわめて難しいことである。

本校で使用している教科書（光村図書「こくご」1上）には、7月の教材として『こんなことをしたよ』〈6時間扱い〉というものがある。子どもたちにとっては、ここでの学習をとおして初めて文を書く活動を体験することになる。

この絵日記をかく（文を書く、絵を描く）という言語活動を通して、子どもたちに身に付けさせたいことは、書くこと的能力を育てることと、伝えることの楽しさを実感することである。そのために、経験したことや想像したことなどから書くことを決め、書こうとする題材に必要な事柄を集めること、語と語や文と文との続き方に注意しながら、つながりのある文や文章を書くこと、書いたものを読み合いよいところを見付けて感想を伝え合うこと、が指導事項となる。

また、体験やその時に感じたことが、読む人に伝わるように、3文程度で書けるようになることや、国語の特質に関する事項として、長音、拗音、促音、撥音などの表記ができ、助詞の「は」、「へ」及び「を」を文の中で正しく使うこと、が評価の規準となる。

しかしながら、絵日記を書くという言語活動は難しいと言われることがあるが、その理由には以下のことが考えられる。

①書く材料がない

作文の苦手な子どもたちにとってこれほどつらいことはない。子どもたちが書く材料を見つけることは大変な苦勞なのである。ましてや、自分の身の回りの出来事に目を向け、じっと観察し、自分の心で感じたり、頭で考えたりする訓練がなされていない子どもほど辛く感じるようである。

また「絵日記を書かせるために、子どもをどこかへ連れて行かなければならないんです。先生、大変です。」という保護者からの訴えを、休み明けの懇談会の場で何度か受けたことがある。自分の指導が至らないからこんなことを言われてしまうのだらうと思いつつ

も、それに対する対応策を以下のようにお便りの中に載せ、絵日記を書く手立ての参考にしてもらった。

『えにつき・ネタ帳～書けなくておこまりのお子さんのために～』

- ・○○へ行ったこと ・○○をしたこと
- ・○○をしているお母さん
- ・○○をしているお父さん
- ・「先生あのね」…で書き出しましょう。
- ・お話をするように書いてみましょう。
- ・自分の思ったことを少し入れて書いてみましょう。
- ・うれしかったこと、悲しかったこと、辛かったこと、はずかしかったこと、腹が立ったこと、不思議だなと思ったこと…をよく思い出して、時には、おうちの方が聞いてあげながら書いてみましょう。

②誰に対して伝えるのが明確でない

このことについては、子どもたちが書いた日記の文を読んでみるとよくわかる。子どもたちの書いた文は、どうしても事実の羅列になりがちで、何となくいきいきとしていない。それは、誰に伝えるために書いているのが明確でないからである。自分の楽しかったことやびっくりしたこと、悲しかったことや悔しかったことなど、自分の感動を伝える相手が明確になると、書く意欲がわいてくるものである。「先生あのね…」で書き始めさせる指導は、低学年の子どもたちにとっては優れた手立てであると考えられる。また、『えにつき・ネタ帳』の中でも触れたことであるが、「先生はみなさんの書いた絵日記を読ませてもらうのを楽しみにしています。」「お返事も必ず書きます。」と付け加えたことによって、子どもたちは、読んでくれる相手が必ずいるということを知り、伝えたいという気持ちが高まってくる。それは、書く側の子どもたちにとってやる気が起こることであり、「誰に」という相手意識を持つことにもつながる。

教科書の『こんなことをしたよ』¹⁵⁾の学習では、読んでもらう相手を、学級の子どもたちにして単元が構成されている。教室の掲示板上に絵日記を貼り、お互いに読みあって感想を述べ合う。「○○君はこんなことがあったの。すごいね。」「○○さんの行ったところへ私も行ったことがあるよ。」など、共感的な態度で互いの絵日記を読ませることによって、次に絵日記を書く時の意欲へとつながっていることがわかる。

③絵を描くのが苦手、字を書くのが苦手

子どもたちに何も言わずに紙を渡し絵日記を書かせ

ると、ほとんどの子が絵から描き始める。『アサガオのかんざつにつき』を書く時も同様のことが起きる。教師が指示をして「文から書きましょう」と言わない限り、ほとんどの子が絵から描き始める。おそらく、視覚で得た情報を表すには、文字よりも絵の方が直接的なであろう。

実はここで、絵が苦手な子は絵日記を書く活動がストップしてしまうことがある。どんなに「字から書いてもいいんだよ」とアドバイスしても、プライドが許さないことが多く、絵日記は白紙の状態が続くことになる。本校の1年生の書いた絵日記の中にも、絵を描くのが苦手という子が何人かいるようだ。おそらく絵を描いているうちに文を書く意欲が半減していったのであろう。文の数、内容にも影響が出ていることがわかる。また、文字の習熟が不十分という子も見受けられる。しかし、白紙でない限り、何かを伝えたいということは伝わってくる。

本校の1年生2学級の冬休みの絵日記について、どのような内容で書かれているのかを調べてみた。題名は、冬休みということもあり「スキー場」「親戚の家」「旅行」などが多い。また文字の量については、多い子でおよそ200字程度。少ない子で20字程度である。平均をとると、1年2組が146.8文字。1年3組が135.5文字となった。文の数で見えていくと、2組が5.7文。3組が5.0文であった。教科書の例文は3文で書かれており、目標とする文の数も3文程度となっていることを考えると、子どもたちは2学期の学習の中で文を書くことに慣れてきていることを感じる。

題名が「無題」となっているものも見られたが、これは題名を書く欄が空欄のままの子たちである。どうして空欄のままになってしまったのかは、子どもたちが書いた絵日記からは読み取ることができないが、1年生の子どもたちの場合は、おそらく書くのを忘れてしまったのであろう。作文に題名をつける指導は、文章を要約し言葉を選ぶ活動が伴うので、子どもたちにとっては、難しく、面倒に感じることもなのかもしれない。

本校の子どもたちは、比較的、休み中にいろいろなところへ連れて行ってもらえる環境にある。したがって、絵日記を書く材料には恵まれていると思う。しかし、内容や文の量に差があるのは、家庭まかせで書いているということや、記憶が新鮮なうちに書かせていないなどの書かせるタイミングなども影響しているのではないかと考えられる。また、親に言われたので書いたなど、本当に書きたかったことと、書いた内容とが違っていたのではないかと推察される。

2) 思いを伝える「てがみ」の実践

本校では児童会が主催して「普段お世話になっている人にお手紙を書こう」という取組が行われている。期間中、画用紙に印刷したはがきと、段ボール箱を利用して作られたポストが廊下の所々におかれる。書いた手紙をポストに投函すると、次の日、係の子が宛先の教室まで配達してくれる。いわゆる「ごっこあそび」であるが、子どもたちの様子を見てみると、楽しみながら手紙を書いていることがうかがわれる。手紙を出すことは自由であるので、強制されることはない。しかし、全く書かないという子はいないようである。一人あたりの手紙を書く枚数は、少ない子で1～2枚、多い子になると10枚以上も書く子がいるようだ。

私のところへも子どもたちの書いた手紙が届けられる。私はその都度、返事を書くようにしている。低学年の子からの手紙が多いのであるが、習ったばかりのひらがなを使ってたどたどしい表現ではあるが自分の思いを一生懸命伝えてくれる。以下はその一例である。

- こまがたたけしさんへ いつもお世話になっています。おしごとがんばってくれ(て)ありがとうございます。(1年女児)
- こうちょうせんせいおげんきですか。きょう、りゅうせいくんが せんせいにおこられて きゅうしょくになったとき りゅうせいくんが せんせいごめんなさいといいました。すごいとおもいました。(1年女児)
- いつもありがとうございます。あそんでくれたりてつだってくれて ありがとう (1年男児)
- いつもありがとうございます。こんにちは やってくれてありがとうございます。これからもよろしくおねがいします。(1年女児)
- いつもみんなのことをかんがえてくれて ありがとうございます。スキーのときも ありがとうございます。うれしかったです。(2年女児)
- まえはあそんでいただきありがとうございます。わたしのお父さんがけがをしましてから何日かたちました。お父さんが早くなおるといいです。校長先生、またあそびにいてもいいですか。時間があればあそびにいきます。(3年女児)
- 毎日、さむい中、外であいさつ(あく手)をして くれてありがとうございます。そんな校長先生を見て、「もっと、勉強をがんばろう。」と思いました。いつもありがとうございます。おたがい、がんばりましょう。(3年男児)

届けられた手紙の中に、「こうちょう」とだけ書かれたものがあつた。学年とクラスはかろうじて書かれていたので、私は誰が書いたのか思い当る子の顔が浮かんできた。1年生のその男の子は、多動傾向のある子で、入学の当初から立ち歩きや友だちとのトラブルが絶えない子であつた。当然のように、叱られることはあつても、ほめられることはあまりない、そんな子である。

私はその子を書いたであろう手紙に返事を書いてみることにした。

「Yくん、お手紙どうもありがとう。こうちょう先生は、毎朝、げんかんでみんなとあくしゅをしています。でも、きみにぬれたてぶくろのままあくしゅをされると、手がぬれてしまって、つぎの人の手をぬらしてしまいます。Yくんがてぶくろをぬいであくしゅをして くれると、先生はとてもうれしいです。」

次の日、彼は私を書いた手紙を持って校長室へやってきました。そして、「校長先生、手紙ありがとう。ごめんなさい。」と言って部屋を出て行った。その次の日から朝の玄関での握手の時、彼は手袋をはずして握手をしてくれるようになった。「こうちょう」とだけ書かれた手紙には、私に、何かを伝えたいという彼のメッセージが込められていたのかもしれない。

3) おとどけアートによる「糸でんわ」

張り巡らされた光庭の糸電話の糸に、昨日降った雪が降り積もり、その雪に朝の光がキラキラと輝いています。不思議な転校生というシチュエーションで登場した“音の芸術家”山崎阿弥さんは、鴻城小学校に有形、無形の作品をたくさん残していつてくれました。糸でんわは、彼女が創作活動の中で大切にしていた「人と人のかかわり」を具現化した作品の一つです。…「全国放送のナレーター(『精霊の守り人』綾瀬はるか主演)を、朝の校内放送で聞いていたのは、贅沢なことでしたね」というのは本校のT先生のつぶやきです…

これは、2学期の終わりに学校便りの巻頭言として私が書いた文章の一部である。おとどけアートという札幌市の事業の一環で、本校に1か月ほど滞在し、創作活動をして行ってくれた「音の芸術家」山崎阿弥さんは、「人と人のかかわり・つながり」を、ある時は形のあるものとして、ある時は形のないもので私たちに示してくれた。朝の校内放送のDJ、壁新聞、そして学校の光庭を使つての糸でんわなど。彼女が使つた自分の思いを伝えるための媒体は、様々であつた。子どもたちは、彼女の作品(時にはパフォーマンス)に触

れることによって、自分の考えを伝えるための手段、方法にはいろいろなことがあることを感じていた。

(3) 「考えを伝える」力を育むためには

新しい学習指導要領では「生きる力」を育むために「主体的・対話的で深い学び」が求められている。そのためには、授業のスタイルを変えていくことも必要になってくる。教師が話し、それを生徒が聞き記憶していく。それだけではいけないことは、だれもがわかっている。絵日記の学習をとおして子どもたちに付けていきたい力を考えた時、「文章を書く能力を育てること」とおさえた。学習をとおして書き方を身に付けさせることは可能だと思う。しかし、さらに深めて内容にまで迫るためには、自分の心で感じて、頭で考えることを大切にしながら指導していかなければならないだろう。子どもたちに教える立場の教師は、そこをしっかりと押さえ、子どもたちに向き合わなければならない。

『続1年1組 せんせいあのね』の筆者である鹿島和夫氏は、解説の中で「わたしの求めているものは、一年生の子どもたちが、「あのねちょう」というノートを書くことによって、人間を見つめる目ができてほしいということなんです」¹⁶⁾と述べている。

遊びや生活の中で、様々な表現の仕方をとおして、「見つめる目」を育てていくことが子どもたちの考えを伝える力を育てていくことにつながるのだろう。

5. 幼小連携からみた「自分の考えを伝える」力を育む言語活動とは

本稿では、幼稚園から小学校低学年にかけての言語活動の事例を示し、特に「自分の考えを伝える」力がどのように育まれていくのか、またそれらを育むためにはどのような配慮が必要であるかを論じてきた。

小学校教育においては、考えを伝えるツールとして、「文字」を用いることが本格的に行われるようになる。文章を書くことは、生涯にわたって人に必要な能力である。絵日記や手紙の実践では、「文字を書く」というテクニカルな技術の前提として、「書きたいと思う心が動く体験」と「伝えたいと思う人がいる」という2点が挙げられた。

また幼稚園での事例からは、教師との信頼関係に基づいた生活の保障が、幼児のまわりの人的・物的環境への働きかけを促し、活動への意欲を育むこと、したい活動を友達と一緒に重ねることが自分の考えを伝える力を育むことを指摘した。

以上の2点から考えると、幼児期には、遊びや生活

の中で自分の考えを伝え、それが相手に伝わり、相手が自分に向き合ってくれるという経験を重ねることこそが大切であり、それがやがて小学校以上の考えを伝える力の基礎になることがわかる。

新しく施行される幼稚園教育要領、小学校学習指導要領の改訂の際の重要事項のひとつとして、「初等中等教育の一貫した学びの充実」が挙げられており、「幼小、小中、中高といった学校段階間の円滑な接続や教科等横断的な学習」を重視する必要があることが示されている¹⁷⁾。幼児教育には教科という枠組みはないが、幼稚園で育つ力が、小学校以上の教育のどこにつながるのかということ意識して保育を行うこと、また小学校では、幼児期の子どもたちの生活を知り、幼児期に育まれた力を活かすためにどのような教育を行う必要があるのかを考えることが一層求められているのではないだろうか。

【引用・参考文献】

- 1) 平尾元彦・平松政徳：大学生のキャリア意識とコミュニケーション能力，大学教員第4巻，山口大学教育機構，pp111～121，2007.
- 2) 日本経済団体連合会（2016.11.15）：2016年度新卒採用に関するアンケート調査結果（http://www.keidanren.or.jp/policy/2016/108_kekka.pdf）2017.2.20取得
- 3) 文部科学省：中央教育審議会答申，2008.
- 4) 文部科学省：幼稚園教育要領，小・中学校学習指導要領改訂のポイント，2008.
- 5) 文部科学省：「言語活動の検証改善の成果」について，2016.
- 6) 文部科学省：幼稚園教育要領解説，フレーベル館，p262～263，2008.
- 7) 同上 p5
- 8) 文部科学省：中央教育審議会 教育課程部会幼児教育部会（第8回）資料 幼児教育部会における審議の取りまとめ，2016.
- 9) 文部科学省：幼稚園教育要領解説，フレーベル館，p141
- 10) 同上 p150
- 11) 文部科学省：小学校学習指導要領，平成20年3月告示
- 12) 安彦忠彦監修 寺井正憲他編：小学校学習指導要領の解説と展開国語編，教育出版，2008.
- 13) 日本国語教育学会監修 今村久二企画編集 水戸部修治他編著：単元を貫く学習課題と言語活動，東洋館出版社，2015.
- 14) 文部科学省：中央教育審議会答申 幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について，2016.
- 15) 「こくご」一上，光村図書，pp96～97，2015.
- 16) 鹿島和夫編：続 一年一組 せんせいあのね，理

論社, p195 1984.

- 17) 文部科学省 (2017.2.14)：学校教育法施行規則の一部を改正する省令案並びに幼稚園教育要領案, 小学校学習指導要領案及び中学校学習指導要領案に対する意見公募手続 (パブリック・コメント)

の実施について 関連資料 幼稚園教育要領, 小・中学校学習指導要領等の改訂のポイント (<http://search.e-gov.go.jp/servlet/Public?CLASSNAME=PCMMSTDDETAIL&id=185000878&Mode=0>) 2017.2.14 入手

Partnerships between Kindergarten and Elementary School for Education

— Nurturing children's ability of conveying thoughts through the language activities —

Mayumi TAKAHASHI

(Fuji Women's University, Faculty of Human Life Sciences, Department of Early Childhood
Care and Education)

Takeshi KOMAGATA

(Sapporo Municipal Kojo Elementary School)

Kyoko OGAWA

(Fuji Women's University, Faculty of Human Life Sciences, Department of Early Childhood
Care and Education)